

の佇まいから年間推計七万人もの来訪

構造物より、もはやアートともいえるそする。幻の橋と呼ばれるゆえんだ。土木

者を迎え、まちのシンボルとなってきた

遺構だが、七○回近く水没と出現を繰り

位が上昇する五月以降、再び徐々に水没

橋体は一月頃より湖面に姿を現し、水

量が減少、一九八七年に全線廃線となっ

枯渇、国道二七三号の開通によって貨物

ツ川橋梁は湖底に沈む。士幌線も資源のを迂回する新線が敷設され、タウシュべ的とした糠平ダムの建設に伴いダム湖備されたが、一九五五年に水力発電を目農畜産物や木材の運搬を目的として整

を上部まで揚げるために丹野式巻上機内では初、川原で練られたコンクリート

鉄道整備の手本となる。士幌線は沿線のといった新設備も開発され、以後の道内

の側壁にのみ鉄筋が施されたが、橋脚部

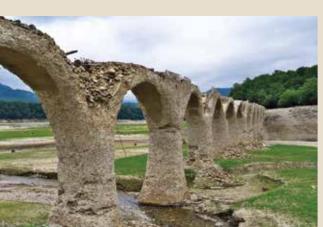
一一連のコンクリートアーチ橋は上部

られた鉄道橋だ。この橋長約一三〇㍍、更川の支流であるタウシュベツ川に架け

旧国鉄士幌線が全線開通した際、音

とアーチ本体は無筋。同形式の橋梁は道

撮影:西山芳一(表紙、並びに当ページ)



上流側は特に崩壊が著しい。表皮のコンクリートが裂けて中込の 石材が崩落している。その時が近づいている予感がある。

受賞した。今回、北海道の大地と一体と 写真集を上梓、土木学会出版文化賞を 収めた土木写真家がタウシュベツ川橋梁 崩壊の速度が加速している。この写真を に改めて耳を澄ませてみたい。 文化財の保護と活用を扱う。時間に磨か の特集はこの橋と同時代に建設された された土木の姿だ」。奇しくも小誌本号 でいい。朽ちていく過程も遺産として遺 言葉少なにこうつぶやく。「これはこれ なろうとしている橋を目の当たりにして なく訪れてはその表情を捉え、五年後に と出会ったのは四半世紀前、以来幾度と 害にも晒され続けた影響から近年その れてきた土木と建築の語り部たちの声 トの膨張と収縮という凍

## タウシュベツ川橋梁

北海道上士幌町

4)

03 | ACe 2023.08